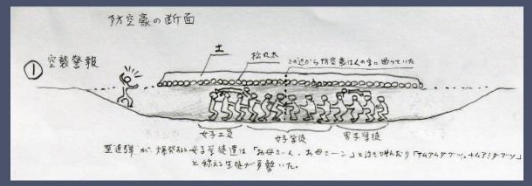
空襲への備え

昭和19（1944）年11月、マリアナ諸島を基地としたB29による本土空襲が本格化し、航空機工場などの軍需施設は空襲の第一目標とされ被害を受け始めました。昭和20年2月、政府は工場緊急疎開要綱を決め軍需工場の分散疎開を図ろうとし、豊川海軍工廠でも工場疎開が行われます。市内の近隣地域や三河槇原・中部天竜・飯田などの飯田線沿線や長野県の下諏訪地方にも疎開工場が設けられましたが、工廠全体からみれば低い疎開率でした。

工廠の西方約5㎞の御津山山頂には海軍の高角砲台が設けられ、工廠内あるいは周辺にも多数の機銃砲台が設けられ、米軍の来襲に備えました。しかし高角砲は多数の編隊に対する工廠の防備にはあまりに手薄であり、また機銃もB29の高度に届くものではなく、工廠の防空体制はほとんど無防備と言えるものでした。工廠内には多数の防空壕が設けられましたが、地下1mほどの穴を掘り天井を木材で組んでその上に土を盛り上げた、至近弾には無力なものがほとんどで、天井のない露天式の防空壕もあったようです。

光学部事務所付近に設けられた防空壕



防空壕の断面図（体験談をもとに、笹原貞治 画）

体験者の証言

工廠の防空については、八糎高角砲一門が工廠西南方の小山に、連装二十五粍機銃砲台二基が工廠至近の処に設けられていた。・・・・

体験者の証言

私たちの航海工場は、長野県の飯田中学校へ疎開することになり、はじめ係官と男子工員が機械据付のため先発した。・・・・